

御殿のインテリア

美しき威厳と機能

小粥祐子 ①

現代の住空間につながる

日本人はなぜこんなに「お城」が好きなのだろうかと思うほど、テレビにも、書籍にもネットにも「お城情報」があふれている。

府を開いて以降、城で重要なのは御殿であった。

かくいう私も小学生の頃、NHKの大河ドラマ「独眼竜政宗」（1987年）に影響されて歴史と城に興味を持った。その夏、祖父と訪ねたいずこかのお城の売店で「城のしおり」なる冊子を買ってもらった。載っていた写真は石垣ばかりだった記憶がある。

天守や石垣などは「敵の侵入を防ぐ軍事基地としての城」に必要な施設。戦闘が日常の時代に、敵の侵入を防いだり、見張ったり応戦したりするためのものであった。その中で織田信長のように一歩抜きんでた権力者が現れると、天守はその力を誇示するための高層建築となった。

だが江戸時代に入ると、軍事施設あるいは権威誇示としての天守は不要となる。対面などの儀礼によって主従関係を示すことが重要となった時代に必要不可欠な施設は御殿であった。それは幕府や藩の政庁であり、主人の生活拠点でもあった。

城というと、多くの人が立体パズルのように積み上げられた石垣や国宝・姫路城（兵庫県）のように高くそびえ立つ天守をイメージする。しかし徳川家康が征夷大將軍となり、江戸に幕府を開いて以降、城で重要なのは御殿であった。

天守や石垣などは「敵の侵入を防ぐ軍事基地としての城」に必要な施設。戦闘が日常の時代に、敵の侵入を防いだり、見張ったり応戦したりするためのものであった。その中で織田信長のように一歩抜きんでた権力者が現れると、天守はその力を誇示するための高層建築となった。

日本で唯一、天守（奥）と本丸御殿（手前）が現存する高知城＝高知市



二条城二の丸御殿の来殿者が控える場所「遠侍（とおざむらい）二の間」。徳川家の権力を見せつける場でもあった＝京都市



例えば「明暦の大火」（1657年）で江戸城天守は焼失したが、再建はされなかった。優先されたのは、焼け落ちた幕府の政庁・本丸御殿と町の復興だった。

城、名古屋城、熊本城などで本丸御殿が復元され、金沢城でも二の丸御殿の復元計画が進む。二条城二の丸御殿に一步踏み入れると極彩色の障壁画に圧倒される。だが、こういった御殿建築の在りようが現代の私たちが暮らす住空間につながっていると聞いたら、少しは御殿に興味を持ってもらえるのではないだろうか。

なかなか「城＝御殿」というイメージは浮かばないかもしれない。身近に感じられないからではないか。江戸時代に建てられた御殿で今も残るのは二条城二の丸、高知城本丸、川越城本丸、掛川城二の丸、金沢城成翼閣、松代城新御殿（真田邸）など数少ない。一方、近年は佐賀

政の場であり住まいでもあった江戸時代の「御殿」。名城大建築学科准教授の小粥祐子さんが、御殿の室内装飾から当時の権力者が発したメッセージや暮らしぶりなどを読み解きます。

おがい・まさこ 1975年浜松市生まれ。昭和女子大大学院博士課程修了。昭和女子大助教、東京都公文書館専門員などを経て現職。専門は日本住居史。著書に「江戸城のインテリア」、共著に「よみがえる江戸城」など。

御殿のインテリア

美しき威厳と機能



小粥祐子

②

虎や松 権威示した障壁画

儀礼の場であり、あるじに男女の性別と役割を逆転した漫画が原作のドラマや映画が人気だが、あの空間は住居なのである。

この二つの機能を持っていた。それは柱と柱、それらをつなぐ横材の長押で囲まれた空間（柱間）、簡単に言えばふすまや壁、そして天井をどのように飾るかに現れた。江戸城本丸御殿を例に説明する。

本丸御殿は現在の皇居東御苑にあった。幕府の政庁で儀式の場である「表」と、将軍が居住する「中奥」（「奥」と呼ぶこともある）、

将軍とその正室・側室の住居群である「大奥」に分かっていた。近年大奥を舞台

に達する。大広間は上段、

中段、下段など複数の部屋で構成された。

本丸御殿は、火災による焼失などで数回建て直された。このうち弘化2（1845）年に再建された御殿は、奥絵師（幕府御用絵師）である狩野晴川院養信による障壁画の小下絵（縮小版の下絵）が残る。大広間の「二之間」（別名「松之間」と呼ばれる）のふすま絵は、天井に届かんばかりの高さの、枝ぶりも五間（江戸城は京間なので一間六尺五寸、約9・8尺）以上にわたって広がる大きな松が描かれる。

なぜ障壁画の虎に大名を

にらませたり、大きな松を

描かせたりしなければなら

なかつたのか。それは江戸城本丸御殿に象徴される江戸時代の武家住宅は、主従関係を視覚的に見せることが必要不可欠な機能だったからだ。御殿の「表」を飾る障壁画は権威を視覚化したものだったのだ。

一方、「中奥」における柱間や天井の装飾は異なっていた。生活の場らしくあるじの意向や使い勝手が反映され、あるじが替われば内装も、時には建物さえも建て替えられたのだった。

（崇城大准教授）

Ⅱ 毎週水曜日掲載